

「僕の宝物」

藤岡 幸夫 (29 B)

今僕はブルガリアの首都ソフィアにいる。外は三月の中旬だというのに吹雪だ。大きな純白の結晶が美しく激しく空を舞っている。異国の街のホテルの一室で、ガラスの向こう側の風景に心が奪われる時、必ず「ああ指揮者になる夢がなかったんだなあ」と実感する。来週もきっと、小雨の降るリヴァプールで同じ事を想うだろう。

僕は、中等部に入學してすぐ、将来指揮者になることを決心した。小学生の頃は「指揮者になれたらカッコイイなあ」程度だったが、目白のカラドラル教会で、本番前のリハーサルをする小澤征爾さんの姿を見た時、全身に鳥肌が立ち、心が震えた。その時から来る日も来る日も指揮者になる夢を見続けた。ピアノも真面目に練習するようになり、当然勉強はしなかった。いつも赤点ギリギリで、それでも気にならなかった。

中等部でのクラブ活動は、月水金剣道部で、火木土が音楽部だ。毎日運動に音楽と好きな事が出来たのは、本当に幸せだったと思う。もっとも剣道部の方は、新しくレコードを買った時など早く家に帰りたいくてよくサボった。それでも三年生の時、港区の個人戦で優勝して金メダルをもらったのは、いい思い出だ。(ただしこの時は、他の二つの音楽中学が試験中で欠場してた。)

素敵な思い出と言えば、初めてガールフレンドが出来てデートをしたのが、一年生の終り頃だったと思う。となりのクラスのピアノの上手な彼女との最初のデート場所はなんと秋葉原だった。石丸電気店のレコード館で、ラヴェルのピアノ協奏曲のレコードを彼女にプレゼント(もしかしだ、彼女が自分のお金で買ったのかもしれない。)したのを憶えてる。もう少し僕がアタマを固めていたら、せめて彼女が銀座に行ったであろうに、秋葉原とはサッパリと趣が異なる。音楽はサー

ターを着て彼女の家に遊びに行つて、僕がトランペットを吹いて彼女が伴奏してくれて、今から思うとかなりマセてた。(当時、僕は赤が好きで、地下鉄のホームで担任の瀬木さんに見つかり、例の口調で「ダメだよそんなことでは。あまり派手な物を着るんでネエソ。」とお説教されてしまったのを憶えている。)

又、福島さんとは帰り道によく、音楽の話に花を咲かせたものだった。

二年生の時、遂に生まれて初めて指揮をした。音楽部の指揮者になったのだ。普通、中学の音楽部の指導、指揮というのは先生がやるものなのに、生徒にやらせるというのはすごく中等部らしい。ましてや二年生である。これは音楽の本宿さんが、部員をよく信頼して下さったおかげで、僕にとって素晴らしい経験となった。二年生の時指揮をしたのは、「シェルブルの雨傘」と「ハンガリア舞曲第五番」、三年の時は、ムソルグキースの「展覧会の絵」から終曲「キエフの大門」で、晴れの舞台は中等部の音楽会だ。本番前に舞台の袖で、緊張するどころかワクワクしてたのを思い出す。たった15分程の出番で、汗びっしょりになってハハハいいながら指揮してた。今思えば、あの時から夢に向かって歩きだしていたのだ。三年前、サントリーホールでデビューした時、演奏会後のパーティー会場の前で、真先に拍手をしてくれたのが、三年の時の担任の三浦さんを始めとする先生方、それに当時の仲間達だった。ほんの一瞬、中等部の音楽会で指揮した直後の自分に戻ったような気がした。

ヨーロッパに住んで七年になる。マネージャーがロンドンにいるので、一年の四分の三はヨーロッパで指揮してる。まだ僕は駆け出しな上に、外国のオーケストラとの仕事はしんどい事も多い。やめたくなる時だってある。そんな時、中等部にいたあの頃を思い出すようにしている。小澤征爾にここが来て、指揮者になろうと決心した中等部時代の僕の夢は、本当に自分の中でキラキラしていた。今でもその輝きは僕の宝物だ。

夢に向かって歩き出させてくれた「中等部」//心の底からありがとう。

ある。生息数は十二才の鳥は、この「自己の欠如」を哲學的危機と考へ、多量相手にバルコニーでアジリ始めたのである。手探りな朝を起した私は、後で、動してはならぬと厳重な注意を受けた。悲劇も随分した。バルコニーから紙飛